

『トリノの奇跡 —「縮小都市」の産業構造転換と再生』

脱工業化都市研究会 編著

藤原書店（定価3300円+税、2017.2）

トリノは、イタリア最大の自動車メーカー・フィアット発祥の地として発展し、その衰退を契機に、文化・観光都市への道を進んだ。産業面でもICT分野等の小さな起業支援に取り組むようになった。世界に誇る「美食の町」でもあり、1980年代半ばから始まったスローフード運動が発足した地域の州都である。本書には再生に関する現在進行形の事例が多数、報告されている。ごく一部となるが紹介したい。

起業支援では、1999年に設置された、ICT関連のインキュベーション施設・I3P（トリノ工科大学イノベティブ事業インキュベータ）がある。支援を受けた173社のうち、93社がビジネスを軌道に乗せ、2015年までに1480人の雇用を創出している。取り組みそのものは決して珍しくないが、本書で注目されるのは、案件発掘力と仕掛けである。I3Pでは、「毎年300のアイデアを集め、100のビジネスプランを審査し、15の新規創業」を掲げる。その実現のため、世界的な起業家発掘イベントをトリノで開催するなど様々な努力を重ねている。また関連企業の横のつながりを丁寧につくり出すことで、卒業企業が、近くの大都市・ミラノ「ではなく」、トリノで定着することに成功しているという。

食の分野では、長年にわたり培われてきた豊かな食文化を背景に、スローフード運動や、ソーシャル・イノベーションの観点からの取り組

みが広がりを見せている。移民を多く抱える地域での社会的包摂の試みなどが、都市住民の食農に対する意識変革を起こしつつある、という指摘が興味深い。何を買うか、どこで食べるかという選択が、フードシステムを変える社会的行為につながる可能性が展望されている。本文では、世界に存在する八億人の飢餓者をも視野に入れるが、美食の楽しみに付加される変革が、根源的な生き方／暮らし方にまで至るのか、今後の報告が待たれる。

本書は、都市の再生が抱え込んだ課題にも目を向ける。サン・サルヴァリオという旧市街の縁にあたるエリアに焦点を当て、都市に娯楽ビジネス地区が設定されることにより、とりわけナイトライフをめぐる、従前から地区に暮らしていた人々と、カフェやレストラン、クラブなどの新規開店／集客が生み出す反抗・衝突・融和が考察される。特に公共空間をめぐる利用の正当性が議論の対象となる。建物に駐車スペースのないサン・サルヴァリオでは、住民は街路に沿って駐車してきた。ところが市当局は、特別税の支払いを条件に新規出店者が店の前にテーブルや椅子を並べ、駐車場を占拠することを認めたのである。本文では、騒音の問題等も合わせ、何らかの規制、政府の介入が必要だと指摘される。ここでより重要だと思われるのは、さらに一步踏み込んだ、市当局に利用料を支払って路上駐車する公共空間の私的利用は問題がないのか、という別章での問いかけである。公共空間は誰のものか——。再生が顕在化させる問いは重い。光と影、都市の息づかいが感じられる一書である。

宗田勝也（同志社大学客員准教授）